鳴き竜事件

草野唯雄

鳴き竜事件　600円

初版印刷　1972年10月20日
初版発行　1972年10月25日

著者　草野唯雄（そうの ただお）　© 1972

装幀者　木村恒久

発行者　中島隆之

発行所　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町3の6
TEL　東京（292）3711
振替　東京108002

印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　小高製本工業株式会社

0093-037229-0961

目次

第一章　ある夜の出来ごと……五
第二章　一度だけの接吻……二六
第三章　要塞の殺人犯……三五
第四章　米満と薬師堂……七一
第五章　豹　変……八五
第六章　森教授のアリバイ……一一〇
第七章　悪魔は誰か……一三七
第八章　亀山上等兵……一七〇
第九章　敵の襲撃……一九三
第十章　手がかりを追う……二二八
第十一章　終　結……二五四

鳴き竜事件

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　ある夜の出来ごと

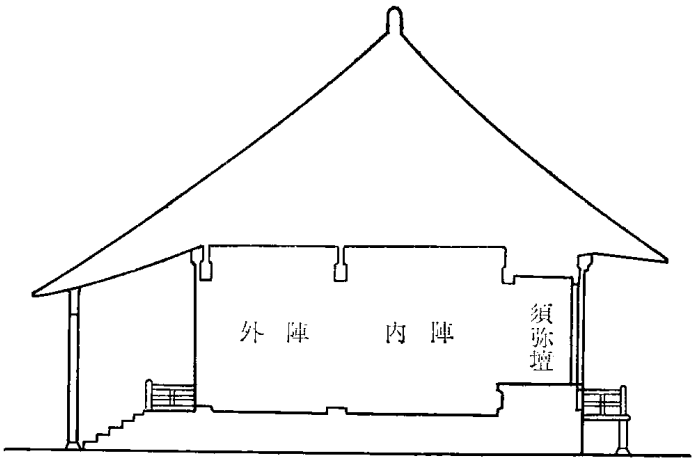
（〝鳴き竜〟復元に関する研究記録より）

この鏡天井には狩野永真安信の筆による竜の絵が描かれていて、竜の頭の真下で拍手（かしわで）を打てば、これに応じて天井からブルブルという奇音がきこえた。あたかも竜が鳴くように思われるために〝鳴き竜〟として有名であったが、三月十五日夜、不幸にして焼失した。

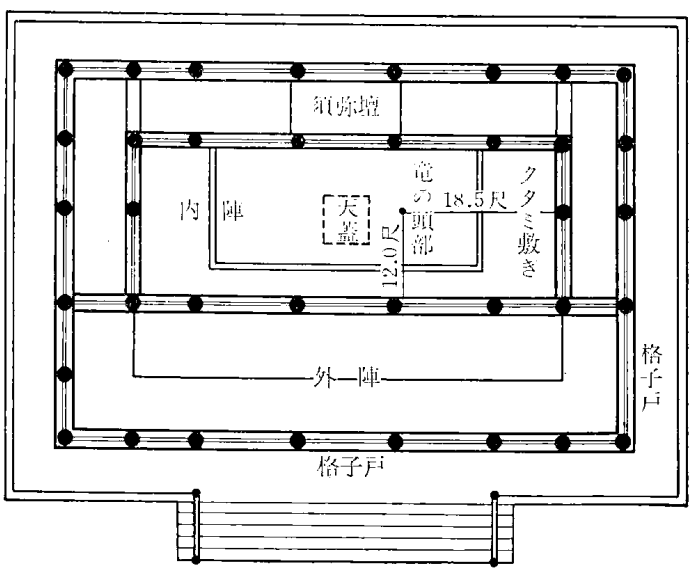
この重要文化財の復元に当って、S大学技術研究所が県当局からの依頼によって〝鳴き竜〟の復元に関する基礎的な研究を行ない、復元が可能であるか否かの答申を求められることとなった。

主任研究員水野武志以下十五名の研究スタッフはその実験研究計画をまず次の五段階に分けて実施することとした。

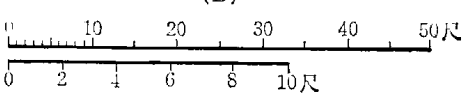
(1) 旧薬師堂の構造その他に関する資料蒐集
(2) 〝鳴き竜〟に関する過去の文献と録音の蒐集及び分析
(3) 幾何作図による〝鳴き竜〟の検討


外陣
内陣
須弥壇

(A)


須弥壇
内陣
天蓋
竜の頭部
18.5尺
12.0尺
クタミ敷き
外陣
格子戸
格子戸

(B)


0
10
20
30
40
50尺
0
2
4
6
8
10尺

(4) 〝鳴き竜〟に関する模型実験計画
　a　模型の製作
　b　模型実験
　c　実験結果の検討
　d　実験結果より得られた結論
(5) 総合的検討と結論

このうち(1)と(2)の段階を既に終了したので、それを左記に略述する。

(1) 焼失した薬師堂の構造その他に関する資料蒐集

薬師堂は家康の本地仏薬師如来を安置した堂で、一名本地堂とも呼ばれる。図(a)、(b)のような建物であり、その内陣の木造の鏡天井に竜の絵がえがかれていた。床は大部分板の間で漆塗りであり、内陣の正面には須弥壇があり、左右と前面は格子がはまっているだけで直接外気に接している。

(備考)

一、当時の薬師堂建築計画は松平正綱・秋元泰朝の両奉行、設計は大棟梁甲賀豊後守宗広が担当した。甲賀家は建仁寺工匠の家柄で、江戸時代の貴族が好んだ寺と神社の建築を調和させた華麗な権現作りはこの頃からはじまった。宗広の子宗次、孫宗賀（豊後守助五郎）も当時少年ではあったが、これに参画している。

二、薬師如来は、生死の苦患を除く故に薬師と称す。「わが名号をひとたび耳に経れば衆病悉く除き身心安楽なり」とある。その像は蓮華台に住し、結跏趺坐し、左手を趺坐の上に仰むけ

にのせ薬壺を持ち、右手は与願印にす。即ち衆生に法性等流の法楽を施与して、無明妄想の疾患を癒すことを本誓念願としている。

三、狩野永真安信（一六一三～八五）は狩野家八代目の画家。孝信の第三子で宗家の貞信が早世したためその養嗣子となった。画法を興以に学んで徳川氏に仕えた。寛文二年法眼に叙せられ、延宝三年内裏造営のとき上洛して賢聖障子を画いた。

その他禁裏、幕府のご用を勤むること頗る多く、貞享二年七十三歳で歿した。安信は中橋の町屋敷を拝領したために、のちその家即ち狩野の総本家を中橋狩野と呼ぶようになった。

その画力は探幽、尚信の二兄には及ばないが、素朴平明の画風を以て一家をなし、また古画の模写に長じ、傍ら鑑定をよくした。

長兄の探幽は夙に著名であり、日光陽明門の絵を作り、次兄尚信は慶安三年四十四歳で行方不明となり、但馬で死んだとの説もある。

(2) 〃鳴き竜〃に関する過去の文献と録音の蒐集及び分析

〃鳴き竜〃は明治三十八年頃に発見されたものとされ、この頃はじめて神宮内部を解放して一般に参拝を許したところから、偶然に発見されたものだという。往時の工匠が工夫をこらして考案したものだという説も一部に伝えられているが、これを裏づけるような古文書は未だ発見されていない。

この〃鳴き竜〃に科学的なメスを加えた最初の研究は大正初期に後藤太、長畑順一郎の両氏によって行なわれたもので、当時の科学雑誌である東洋学芸雑誌に報告され、理学会誌に転載されている《理学会誌（東京高等師範学校）第七巻五号、大正二年五月》。

この報告の一節に次のようにのべられている。

「内陣の正面は仏像の並べてある壇であって、音の反射はよくできない。左右と背面は格子であってこの三方からも音の反射はない。音を反射する所は天井と床のみであって、この平行になっている両面の間を音が往復して、そうして反響が耳にはいるのである」

したがって〝鳴き竜〟の原因が天井と床の間で音が往復反射するためであり、前後左右からの反射が少ないために、これが特に目立つことを指摘している。その後大正末期に当時早大助教授であった佐藤武夫博士が、後藤氏らの研究とは全く別の立場から現地調査をして〝鳴き竜〟の原因について研究し、この結果は早稲田建築学報第五号（昭和二年九月）に報告されている。

この報告ではまず薬師堂の構造と状況について、次のようなことがらが述べてある。

「この堂が山腹の傾斜面を半ば切開き半ば盛土して建てられているために、多少の不同沈下がある。また竜の描かれている鏡天井は建築技術上の原則（天井を水平にすると錯覚のために下に垂れて見えるので、上方にわん曲させて見た目に水平と感じさせる手法）どおり上方に僅かなふくらみを持たせてあり、床の板の間は漆仕上げで局部は多少下方にわん曲して下っている。天井と床面の距離は最大点（竜の頭部）で約十八尺九寸、柱際の最小点で約十八尺七寸あり、上下のふくらみは約二寸である」

つぎに鳴き竜現象については、拍手でなくとも拍子木、石と石、舌打ちなどでもほとんど同じ現象が起り、発音者のほかに四、五名の人がその周囲に集まると奇音はうすらぎ、人を増すに従ってきこえなくなる、などとのべてある。

さらに昭和に入って中村清二、小幡重一、栗原嘉名芽の三氏によりマイクロホン、増幅器、オシログラフなど当時の最新型の測定器による研究が行なわれ、鳴き竜が天井と床という二つ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の反射面の間の音の往復反射に原因するものであることを証明し、昭和十年十月帝国学士院に報告され、その内容は「自然科学と博物館」《第七巻三号、昭和十一年三月》に掲載されている。

この研究により鳴き竜の原因についての説明はほぼ完結されたということができる。

次に録音分析であるが、これは昭和二十八年ＮＨＫによって録音され「音のライブラリー」に保存されているものが唯一の記録である。この録音は拍手を音源としたのではなく、石と石を叩いたものだという。

このテープをシンクロスコープで観察したところ、石を叩いた直後は種々の反射音（残響）が入り乱れているが、約〇・二秒以後の波形にはパルスの連続したいわゆる鳴き竜の波形が、明らかに認められる。

次にその減衰を高速度レベル記録器で記録して部屋の残響時間と同じ定義（60db減衰する時間）によって求めた継続時間は約二・五秒であった。

また減衰の過程で多少の凹凸が見られ、大きくなったり小さくなったりしながら減衰してゆくことがわかる。

1

Ｓ大は一流の私立総合大学である。特に工学部方面の教授スタッフの優秀さで知られている。校舎は工学部、法学部が渋谷区、文学部が千代田区、付属機関である工業技術研究所（略称技研）は文京区といった工合に分散している。この技研の主任研究員は水野武志教授であるが、彼の友人に工学部建築学

科の教授で森高弘という男がいる。年齢は森の方が上だが気の合った親友同士で、現在取り組んでいる研究テーマも協力関係にあった。

森はちょっと変った人物で、その肩書通り本職は技術屋でありながら演劇方面の造詣も深く、その方でもかなり名が売れている。その森から水野は一夕観劇の招待をうけた。彼が部長をしている学生演劇部の公演である。

演題はラシーヌ作のブリタニキュス、いわゆるローマ帝国もので、虎の門のホールで行なうという。学生劇であるから、いずれにしてもそれほど鑑賞に耐え得るものとは思えなかったが、その反面プロの劇団にないような若さ、熱っぽさはあるだろうと考えた。

久しぶりに、そんな若々しい情熱にふれてみるのも悪くない。それくらいの気持で、出かけてみることにした。

午後六時からの開演で、水野がホールにはいったときはすでに劇の四分の一くらいは進行していたが、それはさほど鑑賞の妨げとはならなかった。

テーマは若き皇帝ネロンをめぐるローマ宮廷内の権力争いで、美姫、奸婦、忠臣、逆臣入り乱れるという定石どおりのお膳立てである。多少意外だったのは、工学部というから男ばかりの劇かと思っていたのに、むしろ女の方が多いことだった。主役にはほとんど女子学生が起用されていて、警備兵などの端役だけに男が割当てられている。工学部方面にも女子学生がふえてきた証拠であろう。

席についてしばらくは朗読調の科白まわしになじめず、ぼんやりと眺めていただけだが、そのうちにだんだん劇のなかにひき入れられてきた。

ネロンの母に扮した女子学生のややオーバーぎみのせりふとアクションも、その女子学生の堂々としたボデーから発せられると、それほど不自然さは感じられない。

だが、間もなく舞台上手から緋のマントをはおり短剣を吊った若い皇帝ネロンが登場したとき、水野は、おや？　と思った。

男役のメークアップのせいもあって、最初は他人のそら似かと思ったのだが、あわててプログラムを見るとキャストのところに、

ネロン　中村孝子　（建築学科二年）

とある。やっぱり彼女だったのだ。

ほう――という、一種の感慨とともに、あの夜の出来ごとが鮮かに記憶に甦ってきた。

だが向うは彼を知らない筈である。

彼だけが彼女に強い関心をよせたことも、またごく最近彼女のピンチを防いでやったのも、彼女はまったく気付いていない。そういう一方通行の出来ごとだった……。

それからは水野の目は舞台の上の彼女だけを、追い続けた。スポットライトがほかの演技者に移り、ネロンが暗い舞台の片隅に黙って立っているときも、水野は彼女から目を放さなかった。

なにか心の中の痛みにじっと耐えているかのようなネロンの役を、中村孝子は懸命に演じようとしていた。多少の弱々しさ、線の細さはあるにしても、それは女の子の男役である以上仕方がない。が、少なくとも権力だけを心に鎧って生きようとする男の、孤独な役柄は理解しているように見えた。

孝子のボーイッシュな美貌と、それを意識的に暗くいろどったメークアップが、巧まずしてネロンの悲劇性を鮮かに浮び上らせていた。

特に水野が感動を覚えた一場面があった。

いったんは忠臣の諫言によってブリタニキュスへの害意をといたネロンが、奸臣ナルシスの讒訴によって再び翻意するくだりにきたとき、ネロンは、

「来い、ナルシス。どのようにやるか、その手だてを考えよう」

と言い捨てざま、赤いマントの裾をさっとひるがえして舞台上手に消える。その「来い、ナルシス」という短い言葉のアクセントが、じつによかった。

ただ「来い」というだけの、ぶっきらぼうな命令口調なら、誰にでもできる。だが、男が内心の煮えたぎる怒りを押しかくして、くいしばった歯の間から押し出すようにして言う「来い」には、非常に微妙な抑揚がいる。それを彼女はみごとに抑えた口調で表現したのだ。

これが偶然のできばえでなく、工夫された科白まわしだとすれば大したものだと思った。俳優の天稟があるといわねばなるまい。

水野は演劇に関してはまったくの素人だが、結局観る者の心をうつのは小手先の演技ではなくて、演技者自身の持つ人間としての幅、奥ゆきではないかと、彼流にそう考えている。未熟で、ほんのチラリとではあったが、それが孝子の演技にあらわれた感じだった。

劇が終ったら森といっしょに晩飯を食おうということになっていたが、舞台を片付けてしまうまで待ってくれというので、ホールの入口のソファに掛けて待つことにした。そこから人のいなくなった観客席と舞台とが見える。舞台装置のあと片付けに立働く学生たちに、森が指図しているのが見えた。

やがて片付けが終ると、森は三人の女子学生をひきつれて、やって来た。

ネロンの母アグリピーヌと奸臣ナルシスに扮した二人と、そしてネロンの中村孝子だった。むろんもうメークアップは落して、普段の服装に戻っている。

「この淑女たちの紹介はいいだろう。プログラムを見ればわかるんだから」そう言ってから「こっちのあまりパッとしない中年男は技術研究所主任の水野教授で、本職は音響学だが、いろんな雑誌に雑文に毛の生えたようなものを書いてるいわばタレント教授というやつだ」と、はなはだ一方的な紹介をやっ

た。
「芝居のあとでお前と霞ケ関ビルのてっぺんで飯を食うことになってるとつい話したんだ。そしたらたちまちこのとおりだ」
まるで水野のせいのようにいう。
「結構じゃないか。学生諸君にたかられているうちが花だぞ。それで今夜の会食のスポンサーもきまったわけだ」
「こいつ、おれのせりふを横取りしたな。まあいいだろう。そのかわりお前が三分の一はもて」
「ほう？　どこからそんな理屈が出てくるのかね」
「理屈もくそもない。これだけの美女たちと差し向いで飯を食える。三分の一で済んだだけ有難いと思え」
そういうことになった。女子学生たちは笑っていた。
虎の門に出て霞ケ関ビルに入り、ノンストップの高速エレベーターで三十六階まで登ると、まず料金を払ってパノラマ回廊に入場した。
スモッグにかすむ春の夜ではあったが、数限りない燈火の宝石を撒きちらしたような東京の夜景はたしかに美しかった。ざっとひとまわりして三十五階のレストランにはいった。
東京湾の見える窓ぎわの席に着くより早く「君たち、一番安いものを注文するんだぞ」と森が宣言して、又女子学生たちを笑わせた。
だが食事の間じゅうに、水野はある一つのことに気付いた。ほかの娘たちに対してはなごやかな森の態度が、中村孝子に対するときだけ妙に硬化するのである。二人の間になにか微妙なわだかまりのようなものが感ぜられる。そう言えばさっきから森の冗談のたびに一同が笑うときも、孝子だけは白けた顔

つきでそっぽを向いている。彼女の存在だけがなぜか浮きあがった感じだった。

食事が終って虎の門の交差点で解散した。

水野と中村孝子のゆく先が東横線で、一緒に渋谷ゆきの地下鉄にのることになった。水野はそのことを始めて知ったようなふりをしたが、実はちゃんと承知の上で、内心ひそかにそうなることを期待していたのである。

二人だけになると急に孝子の口がほぐれた。

聞かれるままに彼が今、県当局の依頼で、焼失した薬師堂の〝鳴き竜〟の復元が可能かどうかの実験をやっていることを語ると、孝子はそれに異常なほどの興味を見せた。

渋谷で東横線にのりかえる間も、この話題は続いた。

「昔の大工さんが工夫して鳴き竜天井を作ったという説もあるそうですけど……」

そのような質問も、彼女が、女性としてはまだ珍しい建築学を専攻している学生であることを考えれば、不自然ではない。

「その説は信憑性がうすいね」水野はいった。「私たちはこの実験を始めるに当って、あらゆる資料をあつめ、古来の文献を調べた。が、そういう説の手がかりになるようなものは何一つなかった。結局その説は単なる伝説というよりほかはないようだね」

どんなきっかけで鳴き竜は発見されたのか、とも聞いた。

「明治三十八年にはじめて宮の内部を開放して一般の参拝をゆるした。その頃偶然に発見されたといわれているが、当時薬師堂の天井が鳩のすみかになっていてね。それを追払うために職員が下で手を叩いた。それが発見のきっかけだという話もある」

「話は変りますが、学界ではうちの森教授と水野先生が復元可能派で、K大の細川教授が不可能派の急

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com